

先人の知恵から

50

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

今回は「ふ行～ほ行」まで以下の10個。今回で50回！長々引っ張っているなど反省しつつ、途中で辞められない性格なので引き続き飛ばし気味で書いていきます。最後まであと少し、どうぞお付き合いください。

- ・冬來たりなば春遠からじ
- ・故きを温ねて新しきを知る
- ・付和雷同
- ・下手が却って上手
- ・下手な鉄砲も數打てば当たる
- ・下手の考え方休むに似たり
- ・咆哮する者必ずしも勇ならず
- ・坊主憎けりや袈裟まで憎い
- ・墨子糸に泣く
- ・仏の顔も三度

〈冬來たりなば春遠からじ〉

今は不幸でつらくても、それを耐え忍んで頑張れば、やがて幸せがやってくるということのたとえ。寒く厳しい冬が来れば、その次の暖かく明るい春が来るのも遠くはないという意から。

出典 シェリー

最近、子どもたちは白黒のみで判断する傾向があるように感じる。辛いことが一つでもあると、「もう立ち直れない」、「もう無理」とあきらめてしまう。その結果が不登校の増加ということにもつながっているだろうと思う。辛い時期というのは誰にでも、いつでもあります。其処を耐えたり何とかやり過ごしたりすれば、楽しい時期も来るのに、そこまで我慢が出来ないようだ。そこでこの諺を紹介する。みんなが生まれるす

っと以前から、人は同じことに悩み、苦しみ、時を過ごしてきたのだと。日本は四季がある。冬の次は春、そして巡り巡ってまた冬は来る。それでも冬のあとには必ず春が来る。ずっと春ということは無いが、ずっと冬ということもない。今が辛くても、そのあと必ず楽に思える時、楽しいと思える時が来るとわかつてもらえるように。

英語では・・・

When winter comes, spring is not far away.(冬が来れば春はそう遠くない)

元々は、If winter comes, can spring be far behind?の一節。

＜故きを温ねて新しきを知る＞

前に学んだことや昔の事柄をよく調べ研究して、そこから新しい知識や道理を発見すること。孔子が先生の資格として述べた言葉の「温故知新」を読み下したもの。「温ねて」は、「あたためて」とも読む。

出典 論語

この頃思うのは、昭和は良かったということ。それを言うと年寄りの戯言と言われかねないが、昭和の50年代ごろまでが良かったと思うのだ。先ず携帯電話が一般的では無かった。世の中の動きは今よりずっと緩やかだった。頑固おやじがちゃぶ台をひっくり返す時代だった。親に反発して子どもが暴れる時代だった。子どもと大人の境界がはっきりしていた。カードローンよりも現金主義が主流だった。分相応ということが普通だった。情報に翻弄されることも少なかったし、情報源は新聞とテレビ・ラジオニュースだった。裏アカだとか、ネット

でのいじめだとか、悪い噂が一瞬で広がることもなかった。今みたいに夏が暑くなかった。紙媒体が主流で、漫画も含む本を買う時代だった。フェイクニュースなんてなかった。ゲーム依存やネット依存などと言う病気も無かった。ググることはできなかつたから、地道に図書館や辞書で調べた。そこには無駄があった。無駄はゆとりでもあった。

新しいことが悪いというわけではない。新しいものはとても便利であるし、時短にもなる。今ではAIがなんでも答えてくれる。フェイク動画を素人で高齢の私でも作れる。科学の力は凄い。情報の伝達スピードも、ナノテク等で更にアップしている。パソコンやスマホは本当に便利で、今の我々の仕事にとってなくてはならないものになっている。でも新しい機器は大人の仕事や生活を効率化し、向上するための物なのではないだろうか?ゲームは大人も子どもも楽しめるし、その内容、リアル感はどんどんレベルアップして、それはそれで良いとは思う。楽しみはいつの時代も必要だし、内容は時代とともに変遷するのは当然である。

ただ、子どもたちのためには、スピードや便利さだけではなく、無駄も必要だと思う。ゆとり教育という時期があった。それが失敗だったと人は言う。教育内容にゆとりを持たすことではなく、速さだけを求める、子どもの時はじっくり考えたり、試したり、遊んだり、失敗したりする時間のゆとりが必要なのではないだろうか?

我々は、過去に何を学んできたのだろう?そして、そこからどんな新しいことを発見してきたのだろう?科学の発達と人の心の豊かさは比例しないのかもしれない。

子どもたちを子どもらしく過ごさせるための手立ては、過去に学ぶべきなのではないかなとつとに思う。

＜付和雷同＞

自分にしっかりとした考え方がない、軽々しく他人の意見に同調すること。単に「雷同」ともいう。不和＝わけもなく他人の言葉に賛成すること。雷同＝雷が鳴ると万物がそれに応じて響く意から、むやみに他人の言葉に同調すること。

出典には「^{そうせつ}動説する母れ、^{なか}雷同する母れ。
(他人の説を盗んで自分の考え方としてはならない、むやみに他人の説と共に鳴してはならない)」とある。「尻馬に乗る」「同じで和せず」は類語。

出典 礼記

ネット情報に安易に同調し、いいねをおすまくり、拡散する人々をけん制する諺である。それゆえ、子どもたちや父母たちに伝えることが多い。いじめ問題も絡む。

これだけ様々な情報が流れいたら、何が真実かわからない。フェイクニュースもある中で、有名人の誹謗中傷に安易に同調したり、あそこの何々がおいしいという情報を得て、店前に長蛇の列ができる様子を見ていると、時々怖いなと思う。某国と某国が日本を分割するなどと聞いたら、防衛をもっとしっかりして、攻撃力を上げなければと思う人が出ても何の不思議もない。いきなり他国に攻め入る国がある世界情勢の中では、さもありなんといったところだ。

しかし、他人の意見やあふれる情報に左右されすぎると自分を見失わないと不安になる。特に子どもたちは未熟な状態であ

る。信じ込みやすいし洗脳もされやすい。大人は子どもたちを守るために、もっと慎重に情報を聞き分け、子どもたちにその情報の真偽のほどを説明できるように、先に学んで行かねばならないのではないか？

付和雷同が、良い意味でつかわれることは無い。警告、注意として使われる。筆者もスマホを手放せない子どもたちに、YouTubeばかり見ている子どもたちに、注意を促す意味で、この諺を使っている。勿論保護者達にも、子どもたちを間違った方向に導かないとために、この諺を紹介している。

＜下手が却って上手＞

自分が下手だと思っている人は、良い仕事をしようとして念を入れるので、上手なものよりかえって仕上げが巧みなことがある。また、下手だと、無理をせず危険をおかないので、身の安全を保つことがあるということ。

自分は取り柄がない、不器用だし、ルックスもいまいちだし、センスも悪いし、頭も良くない、運動も苦手、そんなことを訴える子どもに度々会う。何でもできる器用な人は一握りしかいないが、一際目立つから、比較対象になりやすい。そんな人と比べるから自分がみじめになり嘆く。その嘆きの先には「生きていても仕方がない。死にたい。消えたい」となってしまう。非常に短絡的だが、人から自分がどのように見られているか、どう受け止められているかに過敏な子どもたちは、自分に取り柄がないことで存在価値を見出せなくなってしまう。

目立ちたいわけではない。目立つといじ

められる可能性があるから、目立つことに消極的である。程々に存在感を持ちたいのである。いるのかいないのかわからない、空気みたいな存在になりたがる子も多いが、それでも心の奥底では認められたいと思っている。

どんな子にも取り柄はある。よく気が付く、優しい、真面目、丁寧など。目立たないところで良さを發揮している子は沢山いる。そういう子についてはよく観察していないとその子の良さは気づかれない。特に不器用な子については、この諺を使って「そんなに自分を卑下することは無い」と伝えている。不器用な子は、本当に一生懸命頑張って、根気強く何かを成し遂げようとしていることが多い。時間が足りないことがあるので、それを保証してあげると、面白いもの、素敵なものを作り上げることができるし、出来栄えはさっさとできた子よりずっと丁寧だったりするのだ。

そういう意味で、この諺は、何の取り柄もないと思っている子に使っている。

＜下手な鉄砲も数打てば当たる＞

数多く何度もやっていれば、成功することもあるということのたとえ。下手な鉄砲打ちでも、数多く打っているうちには、まぐれで命中することもあるという意から。まぐれあたりをひやかしたり、自分の成功を謙遜するときなどに用いる。「下手な鉄砲も数打ちや当たる」ともいう。

物事を一回失敗するとあきらめてしまう子どもや大人に、この諺を伝えている。繰り返し頑張っていると、何度目かには成功する、上手くいく。それはゲームでも、スロー

ツでも、勉強でも、何にでも言えることだろう。さっさと諦めて次にいこうという人が増えたように思う。でも一方で、粘り強く頑張っている人もいる。どちらが良いということではなく、たまにはちょっと繰り返し頑張ってみても良いのではと思うから。一度成功すれば、もう少し頑張ってみようかなという意欲にもつながるだろう。

＜下手の考え方休むに似たり＞

良い考え方が浮かばないので、いつまでも考えているのは、時間の無駄であって何の役にも立たない。何も考えずに休んでいるのと同じであるという事。囲碁や将棋で、相手が長考しているのをからかっていこうとば。

この諺は度々使う。とにかくぐるぐる思考の子や大人が多いので、この諺を伝えて、脳のエネルギーの無駄使いをやめようと言っている。脳が疲れ果てれば鬱に移行しやすい。眠れなくなることも多い。しかも考えすぎると大抵悪いほうにしか思考が向かなくなる。マイナスに向かう思考であるならやめたほうが良いのだ。やめさせるためにはこの諺が便利である。古くから言われていることは真であると捉えやすい。以前にも伝えたが、発達障害がありそうな子は結構諺にはまってくれるし、そういう子にぐるぐる思考が多いから。

英語だと「馬鹿の考え方」となってしまうのであまり使えないが、日本語の方はそういう意味合いにならないので使いやすい。

英語では・・・

Mickie fails that fools think. (馬鹿の考

えていることは大抵物にならない)

＜咆哮する者必ずしも勇ならず＞

わめきてたり、ほえたりして強そうに威張り散らしている者は、本当の勇者とはいえないということ。咆哮=たけり叫ぶこと。猛獸などがほえること。出典では、この後に「淳淡なる者(大人しい人)必ずしも法(いくじなし)ならず」と続く。

出典 抱朴子

発達に問題を抱えた子が中高生くらいになると、突っ張るのが格好良いと思って、大声を出して周りの子を威嚇したりすることがある。大声に周りはびっくりするので、その様を見て自分が上に立ったような気になっているのである。そういう子にこの諺を伝える。ついでに「淳淡なる者～」の話もする。誤学習をしてしまうと、中々修正が効かないのだが、何度も繰り返し、根気よく、この諺を使いながら説明している。「弱い犬ほど良く吠える」というのも同様に使う。

また、世間でも SNS や YouTube でいろいろわめいている人が居るが、そういう中でも匿名で他人を批難しまくる人も、咆哮であり情けない人だと思う。そのことも加えて子どもたちに伝えている。匿名という隠れ蓑に身を置いて、言いたい放題言っているのは、決して強くもないし、正義を貫いているとも言えない。言うなら堂々と実名で言えばよい。そこにフェイク動画を使っている人もいる。これは最悪である。世の中する人が、そこそこ多いということだ。子どもたちにはそんな人になって欲しくない。

＜坊主憎けりや袈裟まで憎い＞

ある人のことが憎くなると、その人に限りのある物がすべて憎らしく感じられるこのたとえ。坊さんが憎いと思うと、その坊さんが着ている袈裟まで憎く思われるという意から。「法師が憎ければ袈裟まで憎し」ともいう。袈裟=僧が衣の上に左肩から右腋下にかける長方形の布。

幼稚園や小学校で入園・入学時にあの家の子と同じクラスにはしないでくれという保護者が時々いる。母親同士の関係が悪くなつたから一緒にクラスになりたくないのだ。でも子ども同士は仲良しということはよくある。そんな時に、母親がその関係の悪い母親の子のことを悪く言って、我が子とその子との関係性を壊そうとしたことがあった。「あんな親の子なんだからろくなもんじゃない。つき合われたらたまらない。」といつてはいた。子どもには何の罪もないし、親と子は別物である。親同士は特に付き合わなくても、子ども同士は園や学校で遊んだらよいのだ。家を行ったり来たりという付き合いは難しいかもしれないが。

例えば、嫌いなタレントがエルメスのバッグを持っていたら、エルメスが嫌いになってしまふなどと言うのは良く聞く話だ。エルメスには何の問題もないにもかかわらず。人とは本当に心の狭い生き物だとそういう時には感じる。その人と同じペットは飼わない、その人が行く店には行かない、その人と同じ色の車は厭だ等。自分が買った車と同じ車を嫌いな人が買ったから買い替えたという人もいた。

反対に、好きな人が持っているもの、着ているもの、行く店、何でも真似て一緒にしよ

うとするのも反対の意味ではあるが同様だと思う。自分が好きか嫌いかではなく、その人が好きだから、嫌いだから、その人の持っているもの、着ているもの、行く店、ペットに至るまで好きになったり嫌いになったりする。

人と物は別だが、その人を好き・嫌いの中に全部含まれるというのも面白いというか、あほくさいというか・・・。「被った」というのも同じような発想ではないだろうか？

人を嫌いになるのは仕方がないが、その人に属する物や子どもには何の罪も害もない。長年諺としてこういうものがあり続けるというのは、人がいかに愚かなものかという話になる。人の感情というのは厄介なものだ。

保護者や子どもたちに、無意味な、不合理な嫌い方をしないよう、この諺を伝えていく。

英語では・・・

Love me, love my dog. (私を愛するなら
我が愛犬も愛せよ)

＜墨子糸に泣く＞

人間は環境や教育によって、善人にも悪人にもなるということのたとえ。墨子が白い絹糸を見て、染め方によってどんな色にもなることを思って泣いたということから。墨子＝中国の戦国時代の思想家。平等に人を愛する兼愛説と非戦論を唱えた。

出典 淮南子

子どもを育てる上での環境と教育はその子の将来にとってとても重要な要素となる。子どもは白い絹糸のようなもので

ある。どのようにでも染められてしまう。だからこそ、保護者は最良の環境と最高の教育を受けさせようと必死になる。白い絹糸をただ染液につけてそっと染めていくのなら糸も傷まないが、ごしごししたり、引っ張ったり叩いたりしていれば糸そのものが傷ついてダメになってしまう。

同じ白い絹糸でも、強い糸も弱い糸もあるし、白さにも差がある。その糸に合った染料を使い、その糸を傷ませないやり方で染めていかねばならない。

子どもを育てることは、正にこの白い糸を染めるようなものである。その子に合った教育を施し、その子にとって安心安全で成長を促すような環境を保証することが大切である。

そんな意味でこの諺を保護者たちに伝えている。

＜仏の顔も三度＞

どんなに温厚な人でも、何度も無礼なことをされれば怒るというたとえ。仏さまといえども、一日に顔を三回もなでつけられれば腹を立てるという意から。いろはがるた（京都）の一つ。

どんな人でも、嫌な事を繰り返されれば怒るのが当たり前である。しかし、自分を出せない子どもたちは、ただひたすら我慢している。怒ってはいけないと思っているし、怒ったら関係が壊れて修復できなくなるとも思っている。嫌な事を何度もされているということは、相手は本当に友達なのかと聞いてみると、ほかに友達がないことが多い。「この子と離れたらボッちになってしまう、だから嫌な事をされても我慢

している」と。

そんな我慢を続けていたら、おなかが痛くなったり吐き気が出たり、学校に行きたくなくなったりするだろう。

人には我慢の限界というのがある。ずっと我慢して風船が膨らむようにたまって言ったら、ある日爆発するだろう。そうなると言わなくて良いことまで言ってしまって、修復できないような喧嘩になってしまふ事さえある。

この諺を伝えて、我慢も三度くらいにして、四度目には怒りを出してはどうだろうと話す。それがその子のためにもなる。嫌だと思っていることを知らせられるし、何度も繰り返したら私だって怒るということをわかってもらえるし、あなたのやっていることは人を嫌な気持ちにさせているとわからせることになる。だから、ずっと我慢するのは辞めよう伝えている。

出典説明

シェリー・・・Percy Bysshe Shelley (1792-1822) イギリスのロマン派詩人。小説家のメアリー・シェリーは妻。「冬來たりなば・・」は「西風に寄せる歌の一節に由来している。

論語・・・二十編

儒教の經典。「大學」「中庸」「孟子」とともに四書の一つ。孔子の言行や門人たちと

の問答を記録した書で、講師の死後に門人たちが編集したものと言われる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知る上で極めて重要な資料である。

礼記・・・四十九編

儒教の經典。五經の一つ。前漢の戴徳が集録した「大戴礼」を甥の戴聖が編集し直して「小戴礼」とし、これが現在の「礼記」となった。周末から秦・漢時代にかけての礼に関する諸説を集めたもので、日常の礼儀作法、冠婚葬祭の儀礼から生活のあらゆる面に及ぶ礼の記述があり、当時の制度・習俗を知る貴重な資料である。

抱朴子・・・八巻

中国の道教の書。著者は東晋の葛洪。317年ごろに完成。道家思想に基づく不老長生術や薬の処方などを述べた内編二十編と、儒教的な立場から道德・政治・社会を論じた外編五十二編から成る。

淮南子・・・内編二十一巻

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は、前漢の高祖劉邦の孫である淮南王劉安。無為自然の道家思想を中心都市、政治・軍事・天文・地理などにわたって諸学派の説を収めている。内編二十一巻・外編三十三巻があったとされるが、現存するのは内編二十一巻。

参考文献：以前にも掲載したが、此処に載せている故事・諺及び出典説明は「新明解 故事・ことわざ辞典」三省堂編修所編 より転載させていただいている。